

【猪名川恋物語】

昔々のお話です。猪名川近くに結婚したばかりの若い夫婦が住んでいました。しかし夫に突然、容赦のない単身赴任の辞令が。一度出かけたら、いつ帰ることができるのかわかりません。携帯もネットもない時代。ひたすら夫の帰りを待っていた妻は、心配のあまり病気になってしまいます。数年後・・・、ようやく夫が戻り、仕事の報告を終えて家にたどり着いてみると、そこには見る影もなくやつれ、床に臥せっている妻がいました。驚いて言葉に詰まりながらも、夫が詠んだという歌が、『万葉集』巻十六に、

かくのみにありけるものを猪名川の奥^{おく}を深めて我（あ）が思へりける 三八〇四番歌
如是耳尔 有家流物乎 猪名川之 奥乎深目而 吾念有来

と記されています。「こんなことになっているのを（まったく知らず）、猪名川の（川底が深い）ように奥深く私は、（あなたのことを）思っていました」と。妻は横たわったまま夫の歌を聞くと、枕から頭^{かぶ}を上げて声に応え、

ぬばたまの黒髪濡れて沫雪^{あわゆき}の降るにや来^きますここだ恋^こふれば 三八〇五番歌
烏玉之 黒髪所沾而 沫雪之 零也来座 幾許戀者

と返したとのこと。「まっく黒い髪を濡らしながら、沫雪が降るのに（あなたが）来てくださいました。こんなに想っていましたので。」と。ここに生まれた切ない恋物語は、山陽道を往来する旅とともに都まで伝わり、『万葉集』に書き残されました。編者は、妻の歌の内容から、夫が帰ってきたのは雪の降る季節だったのだろうと考察しています。

この物語、阪急池田駅の南側に歌碑を訪ねることができます。通りかかったら、ちょっと足を止めて、二人の恋の行方を想像してみてもいいのではないでしょうか。歌碑には、池田の歴史も記されていますよ。

【『City Life』 2012年3月号北撰掲載】